

からだを解く -プロセスの境界-

東京藝術大学大学院 美術研究科 博士後期課程
美術専攻 工芸領域 (鑄金)
中根 絢女

要旨

本論では「からだを解く」鑄造表現について明らかとすべく、筆者の工芸観と「プロセス思考」に基づく考察、さらには制作概要について述べている。

筆者の表現目的は、鑄造の「プロセス」にある造形要素を抽出し、人体表現と関連づけることにある。その表現は「彫刻」と「工芸」という領域を跨いだ経緯が密接に関係している。修士課程よりブロンズ鑄造表現へ向かったことにより、「工芸」辿り着いた。したがって、筆者の表現の位置付けは、「彫刻」と「工芸」両者に存在する鑄造が交流した人体像となる。鑄造表現に潜む「プロセスの境界」を探る制作こそは、「からだを解く」表現でもある。

本論は、3章から構成される。第I章では本研究の背景について述べた。「からだを解く」という表現に存在する人体への根拠と、鑄造表現に至った経緯について明らかとした。修士課程では、人体像とブロンズとの関係に着目した制作をおこなった。彫刻家小島廣志の研究を通じて、作家が鑄造の工程に介入することによって切り開かれる表現の可能性を見出すに至った。ここから、「工芸」への歩みへとつながったことを論じた。

第II章では、明治初期にもたらされた「工芸」「彫刻」などの領域概念の成立過程や、ブロンズと人体像との関連について考察した。はじめに《老猿》を制作した高村光雲(1852~1934)を取り上げた。現在や将来の美術において、「工芸」と「彫刻」の領域に区画線を引くような議論や定義付けについての成立はもはや難しい段階にあり、筆者の表現も然りである。しかし光雲のように領域として内包される技法や素材について探究することによって、表現に新たな展開をもたらす起因となることは明らかである。つづけて、「ブロンズ像」の歴史的な成立過程をたどるため、西洋の「美術」の影響を強く受けた国家彫刻制作として「モニュメンタルな像」が制作されたことについて検討した。以上の歴史的な条件を踏まえたうえで、改めて筆者の抱く工芸観に対する考え方について論じた。まず「工芸」は明治期に確立した概念の延長にあらず、人間の「ものづくり」のような根本的な行為に「KOUGEI」の形があるとし、橋本真之(1947~)の作品から「プロセス思考」という言葉を編み出した奥野憲一の論と、橋本真之の表現そのものに着目した。次に人体像の位置

付けに迫るため、メダル・ド・ロッソ(Medardo Rosso1858~1928)の「プロセス思考」について繙いた。ロッソは「彫刻」にある素材を用いて「絵画」的な視点に取り組んだり、空間との境界を曖昧にしたりする表現を行いつつ、結局のところ「彫刻」に回帰する。対して、筆者は鑄造の「プロセス」への介入から造形要素の抽出を試み、「プロセスの境界」を探っていることを明らかとした。

第Ⅲ章では、博士提出作品《Untie I》《Untie II》《Untie III》《Untie IV》《Untie V》《Untie VI》《Untie VII》の制作概要を述べた。タイトルにある「Untie」(アンタイ)とは、繋がり、結びつきを解くという意味がある。原型制作から鑄造までの予期せぬ現象などの偶発的な形をありのままに残している点は、「からだを解く」という表現における最大の特徴とも言える。塑造した人体像を解体して「欠片」を作ることによって、像本来の形にとらわれることの無い柔軟な再構成を可能とした。さらに、人体像へ異なる主題を吹き込むことによって、人体像の在り方としてこれまでにない形を模索したことを論じた。

以上のように本論では、歴史的な文脈、技法、「工芸」、「プロセス」から自作について考察を重ね、その意味付けをおこなった。自作については、思考やその制作過程において様々な「プロセス」をたどるが、仕上げない鑄造の形こそは筆者の着地点である。鑄造表現は、作品が金属へ素材転換された時に完成を迎えるが、筆者の表現は共通する主題のなかで展開し、今後も「プロセス」を通じて模索を続けていきたいと考える。